長唄　末廣狩

安政元年(1854年)三月
作詞　三代目　桜田治助
作曲　十代目　杵屋六右衛門

〈本調子〉

描く舞台の松竹も　千代をこめたる彩色の
若緑なる　シテとアド
まかり出でしも恥づかしそうに　声張り上げて、
「太郎冠者、あるか」
「御前に」
「念無う早かった」
頼うだ人は　今日もまた　恋の奴の　お使いか、
返事待つ恋　忍ぶ恋　晴れて扇も名のみにて
ほんに心も白扇
いつか首尾して青骨の　ゆるぐまいとの　要の契り
固く締緒の縁結び、神を頼むの　誓いのオオ〳〵事
濡れて色増す　花の雨

〽傘をさすなら春日山
これも花の宴とて　人が飲みてさすなら、
我も飲みて　さそうよ
花の盃
花傘
げにも　そうよの、
やよ、げにも　そうよの、
げに　まこと

〽四つの海　今ぞ治まる　時津風　波の鼓の声澄みて
謡つ、舞つ　君が代は
万々歳も限りなく、末広狩こそ　めでたけれ
末広狩こそ　めでたけれ